

海人の捨舟

土田龍太郎

鳥が鳴くあづまの國、道の奥にはあらねども東の京のかたほとりにてあひ見てしよりはやく年か過ぎぬらむ。みめかたちことにすぐれたりとはおぼえねども、まみに額づきなど愛敬づきてうつくしければ、常陸帶うち解くるまでのことこそはなからめ、かごとばかりももの言ひてしがなと思ひつきてをりをりにわが訪ひし人あり。さしてさかしくもざえありとも見えず。さはれさる方にゆゑづきておほかたのけはひにをかしきふしのありしかば、けしきばみてかどかどしからむにはなかなかまさりぬべし、おのがよきあはひなるめれば、いかであひ添ひて世を過ぐさばやとやうやうに思ひそめたり。その人はた、言の葉にこそは出ださざれ、われを行末遠くたのまむのけしきなきにしもあらざりけらし。

かくて月日を経るままにやうやうなれまさりゆく頃ほひ、この人の親兄人に伴ひて、西の方津の國難波あたりに移ろはでかなはざることゆゑゆくりなくも出で來たりき。いとほいなきものから、え避らぬ門出でなれば、末の松山波こさぬ契までは交さねども、あひ合ふことはまたいつともしかと定めがたくして、行くも止まるもなごりつきせぬ別れ、せめて消息だには絶えせじとかたみにかね言するほかせむすべとてなかりき。思ひきやこれぞとはの別れなりとは。

かの人去りてより三月がほどは、言ひおきしにたがはで、をりをりに文おこせたり。されどその後は、いかがしたりけむ、おこたりがちになりて、はてはたたいとまれにのみ消息ありたり。その文のおもてさへなにとやらむすげなく見えしは、わが思ひなしにやありけむ、おぼつかなきことかぎりなし。うちつけにかくうとうとしくなりぬるは、いかさまやうこそあらめ、しかじ、ひとりむすぼほれみたらで、とてもものにみづからかしこに赴きてぢきに問ひつめむにはと思ひ立つほどこそあれ、やがて西をさしてぞ出で立ちたる。

攝津國武庫郡の海べに、出で入る異國の大船のげに夥しき大泊りあり。わが訪ふ人の住み處、この泊りにそひて擴ごれる世に隠れなき大都邑の西のはしつ方にあるなるべし。さればいにしへの行平の中納言の白波の寄する渚に海人乙女と藻鹽垂れつつわびたまひけむ須磨の浦は近きにあるべけれども、今はその名残りとしてさらに見えず。高き家居のところせきまで立ちならび、道行く人と車とうたて喧しきこといはむかたなし。

大路小路を辿りありきてからうじてかの住みどころに至りつれども、わが知る人も親はらからもかげだに見えず。家は空家のごとくなりたればいぶかしきこといふはかりなし。隣りて住める商人の言ふやうは、いぬる水無月の頃なりけむ、ここにありし人々こそぞりていづくともなく移り去りたり。その日家の娘に若き男のつとそひていとねむごろにかしづきぬたりしが、女と語らふさまげにいとむつまじげなりしかば、さては婿がねにてあるぞかしとこそよそ目には見えしか。その後ともいづち去りにけむ、行く方たえて知られずとぞ。

かくばかりうきたる女なりしとはゆめ思ひよらざりしわが心こそおそかりけれど、悔みてもかひあらめやは。しばしがほどはただあきれぬてあるにもあらず立ちすくみたり。うつればかはる世のならひ、あだなるをみな性の、よその上にてはかつて聞き知らざりしにもあらねど、わが身にもかくばかりうきめを見むとはなにしかは思ひよりけむ。うはべのみこそまめだちて見えしか、まことはいとすぎがましきこのあだ人に、たれとも知れぬあだし男のやがて誘ふ水とやなりにけむ、身は浮草の根を絶えて流れゆかむよるべの末のなほせちに問はまほし、難波なる滯標てもあはざらめやは、はたせめて住の江の岸に寄るてふ戀忘れ貝だに拾ひてみばやとも思ひみだるものから、今さらに海のほとりをいたづらにさすらへありかむもかへりて人笑へなるべし、すずろにはしたなかるべければ、かひも渚の海人小舟ただうち捨てられてやみなむほかさらにすべなし。なぐさめかぬるわが心かつ悔しくかつ恨めしきままに詠められぬるは

秋風になほこりずまの浦づたひ寄るべ波間の舟ぞかひなき

(平成二十九年三月十四日受附)